

住まうことのアート—マヌーシュのキャラヴァン居住を事例に

筑波大学博士特別研究員 左地（野呂） 亮子

発表者はこれまでフランス南西部ポー地域のマヌーシュを対象として、「ジプシー」や「移動生活者」と呼ばれる人々がおこなう居住の実践を調査研究してきた。本発表では、「アート（技）」を「もの」を媒介とした身体と環境との関係構築の様態として捉え、キャラヴァンという移動式住居に住むマヌーシュの「住まうことのアート」について考察する。

マヌーシュは、第二次世界大戦後、定住化を進行させてきたが、今日もキャラヴァンに住みながら日常的ないしは季節的な移動生活をおこなう。調査地のマヌーシュの中には土地を所有し、そこに家屋を建てて暮らす家族もいるが、彼らもキャラヴァンを保持し、それを睡眠や休息のために用いる。定住化に伴いマヌーシュの生活には様々な変化が生じているにもかかわらず、キャラヴァンは必要不可欠な住居であり続けている。発表では、その理由を、マヌーシュの「住まうことのアート」におけるキャラヴァンの役割、及びその文化的価値との関連を探るなかで明らかにする。

大地に根ざして建てられる定住民の家とは異なり、移動を前提とするキャラヴァンは、物理的構造からいって小さく最小限の設備しかもたないため、マヌーシュはキャラヴァンの外部に広がる野外空間を利用して日常生活を営む。そこでマヌーシュの居住空間は、キャラヴァン内部と外部の野外空間から構成されることになるが、この二種の生活領域では、生活用品の配置や行為のあり方が明確に区別される。一般的に人の住居は、厳しい自然環境からの身体の保護、睡眠や性交といった身体の脆弱性が際立つようなときに必要とされるが、とりわけマヌーシュが使用するキャラヴァンは、環境の中に住まう生身の身体の不完全さを補うための人工物としての特徴が際立つ。キャラヴァンは、睡眠や身体の手入れや着替えといった親密性の高い身体的行為の場として、集団的かつ多目的に活用される外部環境から差異化される。

こうしてキャラヴァンは、身体の脆弱性や私秘性の保護に関わるがゆえに、個々の身体の具体的な状態に応じて個別化される。そしてさらにそれは、人生過程において人が経験する身体の生理的かつ社会的な変容にそって新たなものに取り換えられていく。幼少期は

両親と、思春期には同性の親やキョウダイと、結婚後は配偶者と一台のキャラヴァンを共有するといったように、マヌーシュは、おのおのがその変容する身体性や社会的属性に対応して、その都度「それぞれのキャラヴァンをもつ」ことを重視する。この点において、キャラヴァンは、個人と社会、自然的身体と社会的身体の境界面である「社会的皮膚」[Turner 1995]として、身体を社会化し、他者との関係性の中に適切なかたちで位置づけることで、共同体の秩序維持にかかわるといえることができる。

このように、マヌーシュのキャラヴァンは、独自の物質性とそこに付与される文化的価値によって、マヌーシュの身体と自然的環境との関係のみならず、社会的環境との関係を媒介する「もの」となる。「私たちはエスカルゴのようなもの」とマヌーシュがいうように、彼らの「住まうことのアート」において必要不可欠なものとしてあらわれるのは、生身の身体を包み込み環境の中に位置づける「殻」のような住居の働きである。

引用文献

Turner, Terence S.

- 1995 'Social Body and Embodied Subject: The Production of Bodies, Actors and Society among the Kayapo', *Cultural Anthropology* 10(2): Pp.143-70.